



にも建てるスペースはある。次に撤去は可能か？もちろん当分の間子ども達の遊びスペースとして活用していきたいが、今後何らかの問題が生じる可能性もあるからだ。これも、基礎工事などせずに安全を確保できるのでOK。

児童館閉館時の安全の確保は？未成年者の喫煙場所や、見知らぬ人々の寝食の場になっても困る。それならばと、窓を広く取って外からも良く見える設計にすることとした。子ども達の希望である2階建ては可能か？2階は難しいが、ロフトなら可能である。材料は？これも桜田さんが調達してくださるとい

う。ツー・バイ・フォーの建材は規格が決まっております、この規格に沿った設計にすれば複雑に材料を切る事もなく、短時間で最少の材料で建築できるとのことだった。

こうして、大工さんの指導のもと親子で家を建てるという企画が実現した。題して「秋保木工ランド／トム・ソーヤ達の家をつくらう」。

7月22日(土)、炎天下の児童館にトンカチ



と軍手を手に集まった親子は、総勢70人。児童館の園庭で作業は始まる。この口原ノ後さんは、ご自身の棟梁である菅原さんとアメリカ人大工・マイケルさんも呼んで下さった。まずは土台となる床を作る。アリのように群がった子ども達によって、瞬間に釘が打ち付けられる。次は壁。小さい子どもも真剣に釘打ちしている。マイケ

ルさんが、私達の要望に応じて丸や四角の窓を電動鋸で切り取っていく。これを皆で運び、床の四方に立てる。大工さん達が、ショットガンで頑丈に組み立てていく。ロフト部分も怖がりもせずに子ども達がよじ登り、釘を打ち付ける。屋根作りには、大工さんと館長が大活躍。お父さん達はロフトへの階段を子ども達と作製。こうして、我等が「トム・ソーヤ達の家」が立派に完成した。

子ども達が自らものをつくる機会が減少し、ものづくりの文化を伝える大人の側も既に技術を失っている昨今。大人も子どももプロの技術を目の当たりにしながらの共同作業は貴重な体験であった。また、お父さんの専門技

術を生かして子ども達の遊びを広げるという意味でも興味深かった。父親はとかく子育てや地域活動ではどうも所在なげになってしまふことが多いようであるが、各父親の得意の分野を生かし、その出番を作ること、地域活動が生き生きと息づくのではないだろうか。「トム・ソーヤ達の家」は、その後子ども達の手でペンキを塗られ、青い屋根に黄色の壁の、寸モダンな家となった。「あそこにロープをつるしたらどうだろう」「トムの家で怖い話大会をしよう」「暖簾を作るから布を貸して」「タイヤをクッションにしよう」……「トム・ソーヤ達の家」ができたことで、子ども達の外遊びがぐんと広がりを見せてきた。さらに魅力的な空間にしようと、今後もトム・ソーヤ達の工夫は続きそうである。

